國學院大學学術情報リポジトリ

天然痘の歳時習俗：山東省曲阜市陵城鎮陵南村の場合

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石垣, 絵美 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001598

天然痘の歳時習俗
―山東省曲阜市陵城鎮陵南村の場合―

The Annual Traditions and Customs Regarding The Pevention of Smallpox and Reverence of Associated Dieties:
A Case Study of Lingnan Village (Lingcheng Town in Qufu city) in Shandong Province

石垣絵美

キーワード：天然痘　歳時習俗　掉疙疸　頂紅子　撒饃饃
关键词：天花　岁时习俗　掉疙疸　顶红子　撒馍馍

要旨

中国における天然痘の歴史を考えると、19世紀前半には種痘によって予防が可能となり、山東省曲阜市陵城鎮内では、1950年に種痘接種が開始された。しかし、1978年に鎮内の種痘接種が終了してから2018年に到るまで、鎮内では春に“種花花”を行い、旧暦４月に“掉疙疸”を行い、旧暦５月30日に“挂紅子”を行い、旧暦６月１日に“撒饃饃”、“頂紅子”、“焚紅子”を行うというように、１年間の中で特定の日を定めて天然痘に関連する習俗が行われており、天然痘への対処が歳時習俗化されている。

また、1990年代の農業税の廃止や、2010年以降“土地流轉政策”による土地の依託が開始されたことを受けて、村民の生活レベルが向上したことにより、種花花を行う場所が自宅からホテルに変化するなど、農民の生活の変化に伴う習俗の変化が見られるが、先行研究はこれを指摘していない。

現在の天然痘をめぐる歳時習俗は、親族がホテルで食事をするなど、祝祭的な性格が強く、天然痘流行時の緊張感はない。この点から、天然痘をめぐる習俗は、死に向けたものではなく、治癒に向けた行事であると言える。また、施行者に注目すると、天然痘罹患時には母方の親族が、治癒時には父方の親族が重要となり、天然痘を経て生き延びることは切実な問題であったため、天然痘治癒を経て初めて父方の子どもになったと考えられていたと推察できる。そのため、小児が父方の子どもになる場面は、より厳粛に、外部の者の参加を許さない密閉した状況で行われる。

天然痘の神を家の中に迎え、一旦祭ってから、十字路などの家の外部に送り出し、帰りは同じ道を通らないことから、天然痘の神を外部へ送るために、外部から迎えて祭る“祭送”が行われている。

摘要

从中国的天花史来看，19世纪前期开始接种疫苗后，天花的发病得以预防。1950年，山东省曲阜市陵城镇，在辖区内开始种植疫苗。但是，在1978年停止接种疫苗后，镇内的村民却依旧延续着春天种花花；农历4月掉疙疤；农历5月30日挂红子；农历6月1日撒馍馍、顶红子、焚紅子的诸多跟天花有关的岁时习俗。

中国1990年代废止交公粮，2010年之后开始实施土地流轉政策。因这项政策，农民们开始将自己的土地委托了出去，生活质量得到了大幅度的提高。与之相应，“种花花”这类的习俗，也从之前的在家里进行的也变成了在酒店进行。随着农民的物质生活的的改善，生活习俗也随之变化。针对这一点，先行研究并没有进行阐述。

现在，亲朋好友在酒店聚餐的这种围绕天花的岁时习俗，有着很强的祝福和祭祀的色彩。却没有了天花发病时的那种紧张，畏惧的情感了。

另外，从这习俗的实施者着眼，患天花时习俗的实施者是母亲的娘家人，天花治好后习俗的实施者是父亲的亲族。从这点可以推测，当时感染天花后很难幸存，人们认为只有经过天花的小孩儿才可以成为父系家族里的一员。小孩变成为父亲家族的一员是个严肃的过程，所以必须要在没有外人干扰下的情况下。

往家里迎接痘神，祭祀过后，再把痘神送往十字路口等家宅外面，又不从同一条道路回家。因此，为了送走天花，所以要进行迎痘神，家里祭祀痘神，再后送归痘神等“祭送”的仪式。

はじめに

本稿では、中国の論稿・書籍に関する情報とその引用箇所は、原文通り簡体字を用いて表記する。また、地名や習俗に関する固有名詞は、日本語の常用漢字を用いて表記する。中国における天然痘の初出は、東晋代（4世紀頃）の《肘后备急方》における“比岁有病发斑疮，头面及身须臾周匝，状如火疮，皆带白浆，剧者数日必死，此恶毒之气也。”(1)であり、この記事から、この病は「悪毒之気」によって生ずることや、症状の激しい者は数日のうちに必ず死に至ったことが分かる。その後1796年に英国のEdward. Jennerによって牛痘種痘法が発見されると科学的な治療が可能となった。アメリカの医師Osgoodによって著された《医馆略述》には、“嘉庆九年，英国公司沈医官始来中国，往广州经理医事，寓澳门传种半痘。”(2)とあり、牛痘種痘法が嘉慶9年（1804）にマカオにもたらされ、その後中国全土に広まっていった、とある。1958年以降、世界保健機構（WHO）によって地球規模での天然痘根絶計画が進められると、罹患患者は激減し、中国各地でも種痘接種は行われなくなった。

このように中国では、19世紀前半には種痘によって天然痘の予防が可能となったが、このような科学的な療法が普及する一方で、各地の県誌、市誌、鎮誌、村誌や民俗調査報告書の類いには、北は黒竜江省から南は福建省まで、天然痘をめぐる呪術的な対処を行う事例が報告されている。また山東省曲阜市陵城鎮内の村々では、2018年現在でも歳時習俗の中に天然痘への対処が見られる。本稿は、筆者が2018年5月26日、7月12日、7月13日の3日間にわたり山東省曲阜市陵城鎮陵南村において行った、天然痘をめぐる歳時習俗の実地調査の結果をもとに、現在も伝承される中国における天然痘に関する習俗の実態を検討する。

1．中国の天然痘習俗をめぐる研究

(1) 研究状況と問題点

中国の天然痘をめぐる習俗に関する研究は少ないが、実地調査に基づいた最近の研究として、孔文丽〈撒馍馍:一种民间育儿祛病习俗的研究〉(2017)[(3)]がある。孔文丽は、2015年から2017年にかけて山東省曲阜市陵城鎮陵南村において合計7日間調査をしており、25歳から93歳の村落神職人員、村委会会計、郷村医師、鎮防疫站工作人員、鎮中心幼稚園教師、普通村民への聞き書き調査の記録を約6万字収集している。しかし、固有名詞と数値を具体的に示しておらず、詳細な調査報告に基づいた論点の提示が成されていない。またこの地域における習俗の変遷についても触れられていないため、検討の余地があると言える。

(2) 中国各地の天然痘習俗

筆者は中国の黒竜江省から福建省にかけて、天然痘をめぐる習俗25事例を、各地の県誌、市誌、鎮誌、村誌や民俗調査報告書等から収集した。その結果、中国における天然痘をめぐる習俗には、大きく分けて次の2つのタイプが存在することが分かった。

Aタイプは、天然痘の神を迎えて祭り送るもので、家の中に祭壇を設けて天然痘の神を祭る、あるいは天然痘の神の廟へ行き、香を焚いて拝み、“鼓蓋”、“焼餅”、“饅首”、“饅頭”、“餺餺”、“饃饃”などを供える事例が、黒竜江省省望奎県[(4)]、安徽省[(5)]などに見られる。また、天然痘の神を送るものとしては、天然痘の神の“牌位”や“紅子”、“饅頭”を焼いたり、天然痘の神の神像を曳き廻した

後に焼き捨てる事例が、山東省曲阜市陵城鎮陵南村[6]、江西省景徳鎮市東郊里村[7]などに見られる。

Bタイプは、種痘を接種した児童の家族と親族または隣人の間で贈答が行われるもので、種痘接種から12日後に、親戚が小児に“鼓蓋”、“焼餅”、“饅首”、“饅頭”、“餎餎”、“饃饃”などを贈る事例が、遼寧省沈陽市[8]、北京市順義区[9]、などに見られ、種痘接種後の旧暦6月初一に、小児の家族や親戚が、近隣に住む小児に向かって“鼓蓋”、“焼餅”、“饅首”、“饅頭”、“餎餎”、“饃饃”などを撒く事例が、山東省曲阜市[10]に見られる。

しかし、実際は1年のうちに日を定めてAタイプとBタイプの習俗を、どちらも行う地域も存在する。

2．山東省曲阜市陵城鎮陵南村の概要

(1) 陵南村の位置

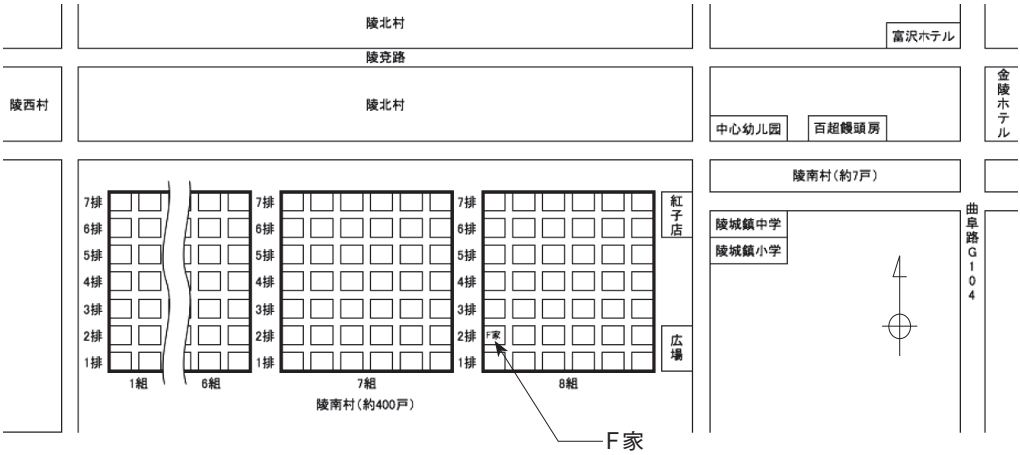
曲阜市は山東省の南西部に位置する省轄県（市）の一つで、済寧市の行政区に含まれる。総面積は895.93㎢、総人口65.07万人。儒学学派を創始した孔子の故郷で、“東方聖城”と呼ばれる。1990年の人口統計調査によると、漢族の人口が592765人（総人口の99.71％）、少数民族の人口が1721人（総人口の0.29％）を占める。少数民族は、回族1632人、満族62人、蒙古族5人、朝鮮族4人、土家族2人、白族などで、漢族を含め計15種の民族が居住している。[11]

陵城鎮は曲阜市の南西部に位置し、東西に10.8㎞、南北に11.4㎞、面積は73㎢である。南は鄒城市、西は兗州区、東は小雪鎮、北は時庄鎮に隣接している。国道104が南北に走り、地勢は平坦で温暖な気候で、地下水源が比較的充足していて農作物の成長に適している。2018年現在、陵城鎮内には1つの自然村（陵城村）と、幾つかの自然村を組織して作られた末端の行政単位である3つの行政村（陵北村、陵南村、陵西村）が存在する。

(2) 陵南村の集落概要と居住形態

1990年の人口調査によると、陵城鎮内の職業人口は、農業54361人（総人口の98.6％）、非農業928人（総人口の1.4％）。2018年の陵南村の戸数と人口は、420戸、1620人で、陵北村は約300戸、1500人、陵西村は約200戸、1000人である。

【図1】陵南村の位置と小組（話者からの聞き書きを参考に筆者作成）



小麦、豆類などの粮食作物の他、綿花、花生、麻、煙草類を栽培している。その他に北京、内蒙、兗州、曲阜などへの出稼ぎで生計を立てている。

図1に示したように、陵南村内には、1978年以前の土地制度のなごりで、西から1組～8組の小組がある。小組1組につき、縦6列、横7列の計42戸が立ち並び。村内の家屋は全て一階建てで、家々は縦横に走る細い路地によって仕切られる。現在小組と習俗の関連は無く、“紅事通知，白事不通知”と言い、“紅拝”（めでたい行事）のみを、東西南北の4方向の家のうち、通知を受けた者で行う。

1990年代からの出稼ぎの増加により、村内の居住形態は様々に変化しており、奶奶と爺爺（父親の父母）と母親と小児が同居するタイプ、姥姥と姥爺（母親の父母）と母親と小児が同居するタイプなどが見られる。また父母がどちらも出稼ぎに出ている場合は、奶奶と爷爷と小児、または、姥姥と姥爷と小児などのタイプも見られる。現在、村内に廟などの信仰施設は無い。以前は村廟があったが文化大革命（1966～1976）によって破壊された。家屋の中に、財神を祭っている家が何軒か見られたが、家ごとに祭る神は異なる。

（3）土地制度の変化と陵南村子村委会

1978年以前は、国によって土地が管理され、村内が“大隊”と“小組”に2分されていた。しかし、田の面積は一定であるのに対し、人口が増減するので不平等

であった。文化大革命の終結宣言が出された翌年の1978年以後、政府は土地を国民に返す政策をとり、人口数によって責任田を分田し、集団によって耕種し、麦などの穀物を“交公粮”として政府に届けるようになった。

その後、陵南村内には共産党の支部書記である“陵南村子村委会”が組織され、これによって土地の所有権と農村の管理がされるようになった。2010年以降、陵城鎮は“土地流轉政策”を開始し、一部の村民は自分の意志決定によって家の土地の管理を、1畝1200元で“陵南村子村委会”に依託し、外部の契約者に貸し出すようになった。貸し出された土地は、民宿やブルーベリー農園等として利用されている。

3．天然痘の歳時習俗

筆者は、2018年5月26日、7月12日、7月13日の計3日間にわたり、山東省曲阜市陵城鎮陵南村において天然痘をめぐる習俗に関する実地調査を行った。筆者が調査を行った話者は、1950年生まれから1990年生まれの計6名の漢族の村民である。なお以下に“　”で示した箇所は、調査地で用いられる言葉で表記した箇所である。

（1）陵南村における天然痘習俗

陵南村では、春に“種花花”を行い、旧暦4月に“掉疙疤”を行い、旧暦5月30日に“挂紅子”を行い、旧暦6月1日に“撒饃饃”、“頂紅子”、“焚紅子”を行うというように、1年間の中で特定の日を定めて天然痘に関連する習俗が行われており、天然痘への対処が歳時習俗化されていると言える。

①**種花花**（zhong huahua）　“種花花”とは、天然痘のワクチン接種の意味で、以前は春に自宅で接種を受けており、接種日は固定されていなかった。1980年代までは、出生から100日後に陵城鎮内の病院で、針で「＋」や「井」の形に傷を付け、その上からワクチンをのせる方法で種痘を受けた。ワクチン接種のスケジュールを書いたボードがあり、いつ何のワクチンを接種すべきか書いてあった。1980年代以前は、人民公社社員として農業に従事しながら医療を施す“赤脚医生”によってワクチン接種が行われたが、それ以後は政府の衛生局がワクチン接種を管理したため、国家に認可された医師によって行われるようになった。陵南村においては、

1981年4月に「＋」印を付けるワクチン接種、1985年3月に陵城鎮内の病院におけるワクチン接種が行われた。

ここで、陵南村周辺の天然痘対策について、《陵城鎮志》[12]や、《曲阜市志》[13]、筆者の聞き書き調査の結果をもとに整理しておく。1912年に曲阜市城区で牛痘接種が開始され、1944年春に、陵城鎮で“天花流行，婴幼儿死亡甚多。”[14]との記事があり、天然痘が流行し、嬰幼児の死亡が非常に多く確認されている。1950年に陵城鎮内で衛生部門により牛痘ワクチン接種が開始された。1947年春には、“陵城南村720人，患天花病的小儿就有52人，死19人，幸存下来的落后遗症的5人（麻脸未计算在内）”[15]との記事があり、陵城南村では小児が52人天然痘に罹患し、死者は19人、治癒したが後遺症が残ったものが5人いたことが分かる。1952年5月に陵城区に医聯会が成立し、1956年に県衛生局が陵城鎮に衛生所を設置した。1958年冬に陵城人民公社衛生院が成立する。1978年には、“全镇消滅了天花”[16]との記事があり、陵城鎮において天然痘が消滅したと分かる。話者からの聞き書きにより、1980年代まで“陵南村子村委会”が、出生から100日目の小児のワクチン摂取を呼び掛けていたことが分かっている。1982年に曲阜市内での種痘接種が終了した。また、1912年から1982年にかけて、曲阜市内で計781859人分の種痘が実施されたとされる。話者によると、2010年まで、種痘接種後は山東衛生庁によって“接種証”が発行されていた。

②掉疙疤（diao geba）　“掉疙疤”とは、天然痘のカサブタが剝がれ落ちることを意味する。出生から100日が過ぎた小児を対象とし、旧暦2月か4月に行う。3、6、8、9、39日の付く日にちが縁起が良いとされ、旧暦6月初六、初九、16、19、29日などに行う。逆に皇帝の節日とされる初一、15日に行ってはいけない。子どもの母親が近日中に“掉疙疤”を行いたい旨を知らせ、親戚を小児の家に集め、日取りを打ち合わせする。親戚とは、主に母方の親族のうち女性を指し、“姥姥”（小児の母親の母親）や“妗子”（小児の父親の姉妹）、“姨媽”（小児の母親の姉妹）などである。“姥姥”は初孫の時には必ず来る。しかし最近は老爺（小児の母親の父親）や男性の親族が参加することもある。

“掉疙疤”当日、姥姥が、商店で買った“紅子”（正方形の1メートル四方の赤い布）、円形の“焼餅”16～20枚、豚肉4～6斤（2～3kg）、小麦粉をこねて油で揚げた“餜子”20個、100元～1000元を紅包に包んだものを、子どもの母親に贈る。豚肉でなく現金でも良い。油条と焼餅は村内の商店で買う。“姑家”（父親の

姉妹)、“姨家”(母親の姉妹)が、200元や300元ほどを小児の母親に贈る。紅包に包む場合もあれば、そうでない場合もある。これらの親戚は、1.5㎞～５㎞程離れた近隣の村に住んでいる。仕事や勉強の関係で親戚とは言っても５㎞～50㎞以上離れたところに住んでいる者もいる。

最近は小児の家に集らず、陵北村内のホテルや曲阜市内のレストランに行って、皆でご飯を食べる。2018年現在も陵南村内で、小児が生まれた際に、“掉疙疤”を行っている家が見られる。

新中国成立(1949)以前は、“麻子芽”(痘痕)のある者が農村の４分の１を占めていたため、種痘接種後、早く熱が出てカサブタが落ち痘痕が残らないようにするために、“発物”と呼ばれる料理を作った。“発物”は誰が作っても良いが、醤油と塩で味付けをした塩辛い煮魚や海鮮(魚の種類は問わない)、豚足に香菜(パクチー)をまぶしたもの、香椿芽(香椿の若芽)の卵炒めなどである。種痘を接種した小児の母親が食べることで、ミルクを介して間接的に小児が食べることになる。

陵南村では、種花花を行う際、約７年前は家で食事をしていたが、生活レベルが向上したことで、手間を省くためにホテルで行うようになった。生活レベルが向上した理由は、以前農民は政府への税金を支払っていたが、1990年代に農業税が廃止され、2010年から政府が農村に、１亩(6.667a)125元の手当の給付を開始したことがあげられる。加えて2008年頃から、農村の土地の請負や、大都市への出稼ぎが始まり、農民の収入が向上したことなどがあげられる。

③挂紅子（gua hongzi）　“挂紅子”とは、旧暦６月初一(2018年は新暦７月13日)に、写真１や写真２のように、大門の上部に“紅子”(赤い布で作った旗)を掛けることを意味する。旧暦６月初一の前日から当日正午までに、小児の父母どちらかが、自分の村か附近の村の匠に依頼して“紅子”を作ってもらう。父母どちらかが“紅子”を、輪切りにした紅大根などに刺し、大門の上部に掛け、レンガなどでおもしをしておく。３角形の部分に黒い裏生地をあてるのが男児の“紅子”で、両面共に赤い生地のものが女児の“紅子”である。男児の“紅子”は家の外側から見て大門の右側に掛け、女児は左側に掛ける。新中国成立(1949)以前は旧暦４月末に“紅子”を掛けていたが、それ以降は旧暦６月初一の前日に買って、当日の正午までに掛けるようになった。2018年７月13日正午の時点で陵城鎮内で“挂紅子”をしていた家は、少なくとも陵北村で５軒、陵南村で３軒確認された。

“紅子”を、現在も売る商店のS社長(1976年生まれ、満年齢42歳、女性)によ

れば、“高粱稈”（高粱の茎）のうち、“莛稈”（穂先のすぐ下のまっすぐな部分）を40㎝ほどに切って“紅子”の軸を作る。長さに決まりはない。高粱を用いるのは耐久性があるからである。材料の高粱は自分で畑に植えて育てたものと、人の家に生えているものを勝手に採ってきたものを使う。赤い布を縦８寸、横３寸に切り、上部は三角形にする。“紅子”の両端に“玉糸”（５色の紐）を束ねて垂らす。色の組み合わせは自由だが、黒、白、黄、緑などが主に使われる。これ以外の色を使っても良い。糸に“黄豆”を各１個か２個通す。“黄豆(huangdou)”の“豆(dou)”の諧音（発音）と“痘疹(douzhen)”の“痘(dou)”が同じであるため用いられる。

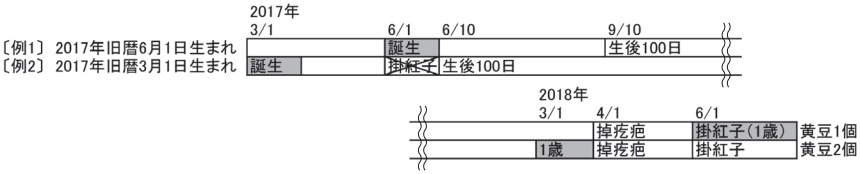
“黄豆”の数は小児の誕生日と関係している。“黄豆”１個の紅子を掛けるのは、誕生してから生後100日の間に、旧暦６月１日を挟まない小児で、２個の紅子を掛けるのは、誕生してから生後100日の間に、旧暦６月１日を経たが、旧暦４月１日の掉疙疤が済んでいないため、挂紅子ができなかった小児が対象となる。図２に、2017年旧暦６月１日生まれの小児を例１とし、2017年旧暦３月１日生まれの小児を例２として、黄豆の数の差を示した。例１の2017年旧暦６月１日生まれの小児は、旧暦９月10日前後に、誕生から100日を迎える。2018年旧暦４

【写真１】大門の右側に掛けられた男児の紅子

【写真２】大門の左側に掛けられた女児の紅子

（写真１、２ともに筆者撮影、2018年７月13日陵南村）

【図2】黄豆の数の差（話者からの聞き書きをもとに筆者作成）



月1日に掉疙疤を行い、旧暦6月1日に黄豆1個の紅子を掛ける。例2の2017年旧暦3月1日生まれの小児は、その年の旧暦6月1日にまだ生後から100日経っていないため、紅子を掛けることができない。そのため2017年旧暦6月1日の掛紅子への参加は見送ることとなる。2018年旧暦4月1日に掉疙疤を行い、この年の旧暦6月1日にようやく2個の黄豆を付けた紅子を掛けることとなる。このように、6月1日を経てから生まれた小児と、それ以前に生まれた小児によって、黄豆の数が1個か2個に区別されている。

S氏は、旦那の母親から“紅子”の作り方を教わり、2008年から作って売るようになった。それ以前は旦那の母親が作っていた。陵南村内のS氏と同世代の主婦であれば普通はこれを作れるが、現在は皆目が悪くなってしまったのでもう作れないという。“紅子”は1年間に1度だけ、6月初一の前日に、その年に生まれた小児の数を概算して作る。“紅子”は1個15元、送子娘娘の牌位も1個6元で販売している。

④撒饃饃（sa momo）　“撒饃饃”は旧暦6月初一（新暦7月13日）に“饃饃”を撒くことを意味する。当日の正午前後に、小児の家の庭に“供桌”を設置し、“痘疹娘娘之神位”や“花母娘娘之神位”などと墨汁で書いた、25㎝×12㎝の赤い袋状の紙を、2本のわり箸に被せてから饃饃に刺し、“牌位”を作り、それと“貢品”を供える。花母娘娘は痘疹娘娘（天花娘娘）と同じである。男の子の場合は送子娘娘で、女の子の場合は痘疹娘娘を祭る。小児の父親が3度に分けて香を焚き、“牌位”に向かって礼をし、“香碗”の奥から3本ずつ3列に刺す。父親が大門に掛けておいた“紅子”を取り外す。

隣人の男性1名が、“南屋”の屋根の上に登り、“簸箕”（箕）に入れた貢品を全て撒く。これを担当する者に年齢制限などは無いが、既婚者で且つ、1年～2年以内に家に不幸が無く、“比較好的人”（比較的良い人）に依頼する。これを担当

した者に、家主が煙草を贈る。屋根から投げる貢品は饅饅（小麦粉と酵母で作った蒸しパン）、杏子、林檎、桃、飴、コイン１元か５角、煙草１本ずつなどで、基本６種類ほどである。この６種類の貢品にはめでたい意味がある。家の前の道路で近所の７歳～10歳の男女の小児とその家族が待っており、屋根から撒かれるものを奪い合う。１年～２年以内に家に不幸があった場合、その人はこの行事に参加しない。

1964年頃、自然災害が多発し、貧乏で食料が不足していたので、饅饅は“撒饅饅”のような特別な日にしか食べられなかった。その日は嬉しくて、皆飛びついて拾った。しかし現在は饅饅を持ち帰っても皆捨てている。昔は自分で饅饅を作っていたが現在は買う。

⑤**頂紅子**（ding hongzi）　“撒饅饅”が行われている間に、家の中では“掉疙疸”の際に“姥姥”（母親の母親）から贈られた縦横23市寸（69㎝）の正方形に切った赤い布を“奶奶”（父親の母親）が母親に抱かれた小児の頭に被せる“頂紅子”が行われる。“撒饅饅”が終ると大門から赤い布を被った小児が母親に抱かれて奶奶と門の外へ出てくる。“頂紅子”は家族以外見ることができない。

⑥**焚紅子**（fen hongzi）　奶奶と父親が大門に挂けた紅子と牌位を、家の前の十字路に持って行って焼く。土を盛って線香をさし、父親と母親が３回礼をする。送り出す場所は十字路であれば良い。春節を過ごす時に紙銭を焼く場所も同じ場所である。痘疹娘娘を送るという意味があり、焼いた後は同じ道を通って帰ってはいけない。小児の頭に被せた紅子はとっておいて、奶奶や母親が小児の冬物の衣類を作る。この衣類には辟邪や、めでたい意味がある。

（2）2018年のＦ家における撒饅饅

話者情報　2018年旧暦６月１日に撒饅饅に参加した話者の情報を整理しておく。以下、姓名をイニシャルで、「名･姓」の順に表記する。小児は2018年２月６日生まれ、陵南村出身のZ.Fである。Z.Fは、2018年旧暦４月16日に掉疙疸を行った。小児の父親は、1983年生まれ、陵南村出身で、曲阜市内で運転手をしているM.Fである。小児の母親は、1990年生まれ、南駛村出身のJ.Wである。小児の父親と母親は、2016年旧暦８月初九に結婚し、母親は結婚後、南駛村から陵南村のM.Fの家へ嫁いだ。父母と小児の他に、1961年生まれの奶奶（父親の母親）M.Lと、1962年生まれの爺爺（父親の父親）H.Fが参加した。調査当時、Ｆ家

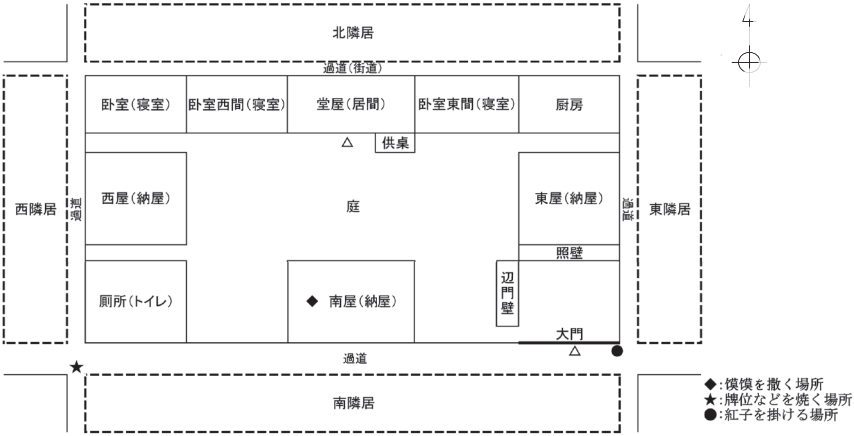
では、父親が出稼ぎに出ているため、父親の両親と母親と小児の４人で居住していた。親族の他に饃饃を撒く担当の、1984年旧暦５月生まれ、戸籍は陵城鎮西宮村であるが、現在陵南村在住の、W.Cが参加した。

2018年旧暦６月初一の流れ　筆者は、2018年旧暦６月初一（新暦７月13日）の11時から、12時20分にかけて、陵南村のＦ家における撒饃饃の準備から片付けまでの様子を、映像や写真で記録した。それらの記録と話者からの聞き書きをもとに、当日の流れを整理する。旧暦６月初一前日に、父親が花母娘娘の牌位を、商店に行き、６元で購入する。前日16：00に父親が紅子を大門に掛ける。Ｆ家の平面図を、図３に示した。Ｆ家の周囲には、“過道”を挟んで東西南北に隣居が接している。住居の南東に大門があり、その右側に紅子を掛ける。

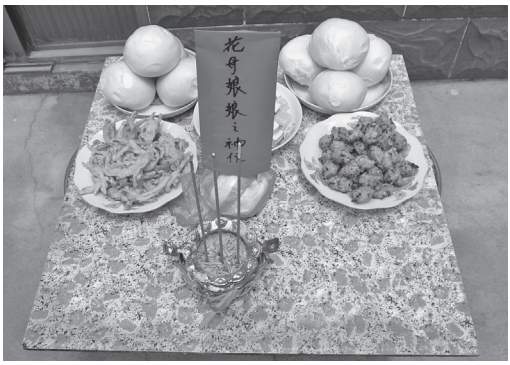
旧暦６月初一当日早朝に、小児の家族が、饃饃を屋根から撒く人に、撒いて欲しいと依頼する。11：00に父親が饃饃を幼稚園の東門附近の饃饃店で購入する。直径９㎝、高さ６㎝の大きいものを８斤16元で買う。11：50の時点で、図３に示した堂屋と呼ばれる北側の部屋に小児、父親、母親が集まる。奶奶（父親の母親）が、厨房で“貢品”を作る。母親はこの時点から12：08まで堂屋で子どもを抱いて座っている。11：53に、父親が図３の堂屋の南側の庭に、“供桌”を出し、奶奶が写真３、図４のように“貢品”（左から土豆絲、熏豆腐、素丸子）をその上に供える。土豆絲（じゃがいもを細く切って炒めた物）と素丸子（肉や魚を使わず、豆腐などを丸めて油で揚げた物）は、奶奶が作ったもので、熏豆腐（豆腐の薫製）は小児の父親が商店で買ってきたものである。

11：57に、饃饃を撒く担当のW.Cとその娘がＦ家を訪れる。小児の父母からW.Cへ20元と２箱の煙草が贈られるが、W.Cは断った。そのかわりに撒き終えると饃饃を２つ持ち帰った。11：58に、父親が線香３本に火をつけて、立ちながら線香を持った手を頭の上に１回掲げる動作をし、“貢品”の手前に置いた“香碗”に、横１列に挿す。12：00に、父親が堂屋で、“花母娘娘之神位”と書かれた赤い紙（牌位）を、ビニール袋でくるんだ饃饃１つに割り箸２本で刺し、庭の“供桌”の熏豆腐と“香碗”の間に設える。12：01に、堂屋で父親が奶奶に教わって２枚の皿に、各４個ずつ袋から出した“饃饃”をのせる。下段に３個、上段に１個のせる。庭へ行き、“供桌”の貢品の後ろに左右各１皿ずつ供える。徐々に大門の外に近所の人々が集ってくる。12：05に、W.Cとその娘が堂屋で、簸箕（竹製の箕）にチョコレート約10個と飴約10個、箱から出した煙草（約10本）、小さい林檎

【図 3】F家の平面図（話者からの聞き書きをもとに筆者作成）

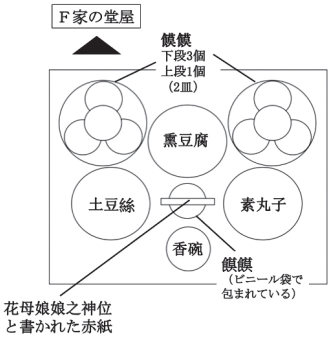


【写真 3】供桌の上の貢品



（筆者撮影2018年７月13日陵南村）

【図 4】貢品の配置と内容



（筆者作成）

（11個）、黄色の杏子（14個）、１角と５角（各３枚ほど）を入れ、庭へ持って行く。12：06に、父親が２柱目の線香（３本）を焚く。12：07に、父親と奶奶が堂屋で撒く分の饃饃をビニール袋に包んで袋の口を縛り、庭の簸箕に入れる。12：08に、母親が庭の“供桌”の前で３回“磕頭”（ひざまずき両手をついて３回地面に頭を近づける）をする。父親と母親が供桌に供えておいた饃饃８個を１つずつ赤と黄の縞模様のビニール袋に入れ、庭の簸箕に入れる。その間奶奶が手に小児の

頭に被せる紅子を畳んで持ち、小児を抱いて堂屋にいる。父親が大門に掛けておいた紅子を取り外すように促される。12：10に、父親が家の中から椅子を２つ持ち出し、大門に掛けておいた紅子を取り外し、家の中にもっていく。母親はそれを見ている。12：11に、母親が同屋で紅子を広げて持ちながら子どもを抱き、奶奶が付き添う。この時点で母親と父親と子どもと奶奶以外は大門の外に出なくてはならない。奶奶が子どもの頭に紅子を掛ける。12：12に、W.Cが大門の前の通りで爆竹を鳴らし、母親が頭から赤い布を被った子どもを抱き、大門の外に一旦出てすぐに中に入る。大門は父親によって閉められ、家の中の様子は見えないようになる。W.Cが簸箕を持って、図３の南屋の屋根の上に姿を表す。12：13　外

【写真 4】撒饃饃の様子

【写真 5】紅子を燃やし礼をする母親

（写真４、５ともに筆者撮影、2018年７月13日）

に集った近所の人が、ひっくり返した傘や帽子を持って大門の外で待ち、“撒！”（撒け）などと口々に叫ぶと、写真4のように、撒く人が3、4回に分けて菓子などを撒き、下で人々が競い合ってそれを受け取る。12：14に、撒き終ったタイミングで奶奶が大門の扉を開けてうながし、中から紅子を被った小児を抱いた母親と奶奶が出てくる。12：14に、近所の人は帰る。小児を抱いた母親はそれを待っている。家の中から父親が奶奶に促され、大門に掛けた紅子、饃饃とそこに刺した牌位、金色の紙で作った紙銭を持って家の外に出てくる。後ろから子どもを抱いた母親もついて歩く。図3に示した、南西の十字路に辿り着くと、道の隅の土を奶奶が3握りくらいとってきて地面に盛る。12：16に父親が地面に盛った土の真ん中に穴をほり、紙銭にライターで火をつける。風が強くなかなか火がつかないので奶奶が手伝う。12：19に、折ってあった紙銭を広げてそこに火をつけはじめる。牌位，挂紅子、牌位が刺さっていた饃饃を火にくべて燃やし、線香1束に火をつける。父親が東側を向いて線香の束を持ち頭の上に1度掲げる動作をし、線香を土の真ん中に立てる。奶奶が子どもを抱いている。12：20に、父親が西側を向いて手をついてひざまずき3回地面に頭を近づける。奶奶が母親に赤い布をわたし、写真5のように母親が父親の左側で、赤い布を膝の下に敷いて手と膝をついてひざまずき、3回地面に頭を近づける。奶奶が子どもを抱き、母親が紅子を持って、来た道を戻り家の中へ入る。

論点

以上の実地調査の結果から、次の6点が指摘できる。

（1）実際の種痘接種から善感までは10日前後と短期間であるのに対し、天然痘をめぐる春に種花花、旧暦4月に掉疙疸、旧暦5月30日に掛紅子、旧暦6月初一に撒饃饃と頂紅子、焚紅子、というように、種痘接種してからカサブタが剝がれ無事に治癒するまでの対処が、春から夏にかけて長期間にわたって日を定めて行われる歳時習俗として存在している。

（2）天然痘流行時は罹病時に行った習俗を、種痘普及後は種痘接種時に、現在は歳時習俗として特定の日に行っている。天然痘罹病時に行っていた習俗に、種痘の普及が重なることで天然痘治療の現実性が担保され、天然痘対処のための習俗が種痘によって普及したと考えられる。現在の天然痘をめぐる歳時習俗は、親

族がホテルで食事をするなど、祝祭的な性格が強く、天然痘流行時の緊張感はない。このような点から、天然痘をめぐる習俗は、死に向けたものではなく、治癒に向けた行事であると言える。

（3）種痘接種の時期に、小児の母親の母親である姥姥と、母親の姉妹が中心となって掉疙疤が行われ、治癒する時期には、小児の父親の母親である奶奶が中心となって頂紅子が行われる。このように、天然痘罹患時には母方の親族が、治癒時には父方の親族が重要となる。この点と、天然痘は重篤な場合は死に至る非常に危険な病であり、天然痘を経て生き延びることは切実な問題であった点を合わせて考えると、天然痘罹患前は母方の子どもであり、天然痘治癒を経て初めて父方の子どもになったと認められるため、掉疙疤は母方中心、頂紅子は父方中心の儀礼であると考えられる。ここから、当時の天然痘をめぐる習俗の重要性がうかがえる。

（4）頂紅子は外部の者の参加を許さない状況で家族のみ参加し、撒饃饃は近隣の人々も参加して盛大に行われる。このように、天然痘をめぐる一連の習俗は、密閉と開放という２つの場面で構成されている。頂紅子を行う際は、大門を閉めて外から見えないように密閉してから小児の頭に紅子を被せるのは、小児が父方の子どもになる場面は厳粛性が増すためであると考えられる。

（5）天然痘の神を家の中に迎え、一旦祭ってから、十字路などの家の外部に送り出すという“祭送”が行われている。

（6）陵南村では、1990年代の農業税の廃止や、2010年以降“土地流轉政策”による土地の依託が開始されたことを受けて、村民の生活レベルが向上したことにより、種花花を行う場所が自宅からホテルに変化するなど、農民の生活の変化に伴う習俗の変化が見られる。

注

（1）陈邦贤《中国医学史》北京：团结出版社，2011

（2）（1）

（3）孔文丽〈撒馍馍：一种民间育儿祛病习俗的研究〉山东大学硕士学位论文，2017（中国知网电子版）

（4）“小儿出天花，室内供痘疹娘娘，设馒首十五个，插花一枝，每日焚香叩拜。痴落后，将神牌送于庙内焚之，馒头与花皆弃之，谓之‘送痘奶奶’”（《中国地方志民俗资料汇编（东北卷）》，书目文献出版社，1989，p.457，黑龙江省《望奎县志》1919）

（5）“请“花娘娘”（又名痘神娘娘），我乡在旧社会，有人出天花，就将传说专管天花的神（却所谓

花娘娘）请回家，用红纸写成牌位供奉在患者的寝室里，早晚烧香，全家吃素，患者的父母也要暂时分寝，直到出天花全愈，才用彩纸扎成轿马拿到野外烧化，以示将花娘娘送走。建国后，普遍实行接种牛痘疫苗，预防了天花发生，现在天花病菌在我乡已根本绝迹这种迷信再没有人搞了。”（李瑞麟《峨岭乡志》第六篇》，p.1）

（6）“焚红子是“送娘娘”的最后一个步骤。镇上居民的“焚红子”比较简单。撒完馍馍以后，奶奶和妈妈给孩子顶上姥姥家带来的三尺红布，带上家中供飨的“痘疹娘娘”的小像、牌位以及先前挂在门上的红子的一块，到小区大门外的大路上，妈妈抱着孩子，奶奶跪在地上磕头几个头，将神像、牌位、红子一起焚烧掉。几分钟后即可礼成，回家。老人们说，这就是“送娘娘”。对于送的“娘娘”是哪个娘娘，都说是“送子娘娘”。至于为什么是送子娘娘，她们也说不清楚。”（孔文丽〈撒馍馍：一种民间育儿祛病习俗的研究〉山东大学硕士学位论文，2017）

（7）“送娘娘 在二十世纪三十年代时，景德镇市东郊里村（多为菜农，也有瓷业工人等杂居）的小孩种牛痘，还是沿袭吹苗的遗风。有小孩种痘的人家，家里都要供奉“天花娘娘”，日夜香灯不息，早晚磕头礼拜，并用红纸写上“天客在堂”四个字贴在门外墙壁上。村子里要立娘娘坛，坛内供有纸扎的天花娘娘、金童、玉女、韦陀等神像，神像有人一样高，还有一只纸扎的白飞鹅，比真鹅还要大。全村公推三至五人当头首，负责送娘娘事务。其中推选一人负责日常工作，没有薪水的，并雇请一人待候娘娘坛里的香灯。同时，还要搭台演戏（当时，景德镇只准演傀戏，但唱饶河调（赣剧），剧目多为《满堂祸》、《万里侯》等彩头戏），在戏台对面专搭一个棚子，每天开演前，就敲着“锵七当七，锵七当七……”的锣鼓，派专人把娘娘、金童、玉女、韦陀、大白鹅等接到棚子里来看戏。戏演完后，又要打着锣鼓送娘娘回坛。戏场中央，还要栽个四至五米高的木架，上扎一根横木，好象秋千架，演完戏以后，便在横木上吊花筒“放花”（焰火），使夜空瑰丽多彩，人人雀跃。有钱人家，在种牛痘前几个月，就请纸扎师傅来扎“挨系伞”。等到小孩的痘疮脱落时，就有人拿着一只约50公分长的纸船，敲着“冬冬锵，冬锵……”的锣鼓，到各家通知送娘娘的日期，各家都要给一把“茶叶米”（米里掺茶叶）。送娘娘的一天，凡是前米参加的人以及挨系伞和抬阁等，都到演戏场上集中。看热闹的人，也从四面八方赶米，人们七嘴八舌地评论着，谁家的伞扎得好（好的挨系伞，有五层，五米多高，上面每层开八面门或六面门，每面门扎有各式各样、栩栩如生的戏文人物，有不少还能活动，如“武松打虎”，拳头一起一落：“貂蝉拜月”一跪一拜；“三英战吕布”，刘、关、张三人围着吕布团团转等。有的是庙门一关一开，小和尚的头一伸一缩：还有扎了农村小水车，还真能把水慢慢车上去，又流下来，水流不息，还有（中略））同时人们评论哪架抬阁的孩子打扮阔气，生得漂亮等（抬阁的小孩，也化妆成各种戏文人物）。送娘娘的人都到齐了，就出发。先是十多个打神铳的走在最前面，他们先放一排铳，以后每走一、二百米就放一排铳，一直放到河下。接着便是十番班吹喇叭和大号，引导天花娘娘等的神像，还有一只纸船，长约一米七八，上写“顺风相送”。再接着是“挨系伞”，（中略）最后面是种了牛痘的小孩，由各人的母亲抱着。大一点的孩子自己拿着一根香和一把小纸伞，年小的由母亲拿香持伞，有钱的人是坐在轿里抱小孩的，香和伞插在轿边上。至于穷人，自然是用两只脚走了。队伍走到河下，打神铳的放完最后一排铳接着就点燃香烛放鞭爆。这时，大家就把天花娘娘等神像、纸船、挨系伞、小孩手里的小伞等，集在一堆，一把火烧光，正如毛主席《送瘟神》诗中所写的那样“纸船明烛照天烧。”送娘娘要花很多钱，二十年代，里村曾这么隆重地送过两次，以后也一直是有小孩种牛痘的人家，仍供奉娘娘神位，并有送娘娘活动，直至解放后，才没人供奉娘娘了。”（江华・黄声辉《景德镇市戏曲志》2003，p.3）

（8）“小儿女有出痘一关。俗以痘为花，有天然自出者，亦有由医引种者。于落痂时平安无恙，视

为喜庆事，以故至亲至戚多以饼果馈遗”(丁世良·赵放编〈辽宁省沈阳市新民县志18卷〉《中国地方志民俗资料汇编 · 东北卷》1989，书目文献出版社)

(9)“小儿种痘时家供痘神。十二日后，戚备烧饼馈送相贺，名曰‘揭疙渣’”(《中国地方志民俗资料汇编 (华北卷)》，书目文献出版社，1989，p.21。北京市《顺义县志》1933)

(10)“小孩种上牛痘之后，会发成一个小浓疱，到六月六时，已经结痂掉盘，亲戚会前来送礼庆贺，名为‘掉疙疤’。礼品多为炸油条、烧饼、红布等。(中略) 凡出天花的家，总要在大门上挂个红布条，以求吉祥，这也是告示邻人与亲友：家中有出天花的，不要随便来串门。(中略) 在家中摆供祭祀‘痘疹娘娘’的礼仪完成之后，要把上供的馍馍、杏、制钱等放在簸箕里，从院内隔墙头撒到街上，任凭早就等侯在墙外的邻居大人小孩们抢食，以求热闹和喜庆；同时预示痘神就走了，这叫‘痘撒馍馍’。”(《东方圣城曲阜》编写组编：《东方圣城曲阜》，北京：中华书局，2001，p.332)

(11) 山东省曲阜市地方史志编纂委员会《曲阜市志》山东：齐鲁书社，1993

(12) 曲阜市陵城镇编志组《陵城镇志》1992

(13) (11)

(14) (12) p.3

(15) (12) p.265

(16) (12) p.271